

---

# TATARI 祟り

樹恵瑠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

T A T A R I 崇り

### 【Nコード】

N 4 9 9 1 I

### 【作者名】

樹恵瑠

### 【あらすじ】

ある神社の神が蘇る祭が行われる一週間。

神は、封印から解かれて行った街で、ある男と出会う。

巫女は、ある男を思い続けていた。

巫女の兄は、男を思うがあまり狂い出した妹と神を鎮めようとした。

三人の思いが交わり、行き着いた先にあるものは……。



ない&たまにムカツク兄貴、朱島しじま 愁しみ。親が死んでしまい、あたしと兄貴は二人だけでこの神社に住んでいるので、こうして境内の掃除をしたりするのもいつものことだ。

「もうすぐ『復活祭』なんだから、もっと念入りにやらなきゃだよ!？」

「うん……。そうだね」

『復活祭』とは、この神社に住んでいるという神『愛美様』が一年に一度だけ眠りから覚める一週間のこと。5月1日〜5月7日まで、この神社は屋台が立ち並び、たくさんの人でにぎわう。といっても、本当に『愛美様』が復活して人前に姿を現す……。なんて事はなく、ただのお祭みたいになっているんだけどね。

あたしが家(この神社のこと)に戻ろうと、後ろを向いたときだった。

「あ、海ちゃんに愁くん。こんにちわ〜」

「さ、西条さん! こんにちはわあ!」

「キヤー! かつこいい!!」

私が挨拶した人、西条さいじょう 京哉きょうやさんは、人なんか誰も来ないようなこの神社に、いつも来てくれるやさしい人だ。

しかも、なんか、かつこよかつたり……。えへへ。あー、あたし今、西条さんの近くにいられて、すごく幸せ……。

「? 海、なんか顔赤いけど。熱でもある?」

「んあつ、兄貴! ちよつと、いきなり話しかけてこないでよね! びっくりしたじゃないっ!」

「え? あ、ゴメン……。てか、もしかして西条さんが俺に惚れてたとか?」

「!?! うわわっ!」

え、何で分かるの!?

「もしかして、図星だったり?」

うわ、どうしよう。今絶対あたしの顔、りんごみたいに真っ赤っ赤だ!

「ち、ちがーうつ！ 違うから、絶対違うー!!」

「えー、本当に？」

「ほ、本当だからね！ もう、兄貴の馬鹿野郎ー!!」

あたしは兄貴にビンタを食らわせると、一目散に逃げてしまった。

(あ、ヤバイ。京哉さんに本性見られちゃったかも・・・)

・・・?

なにやら外が騒がしい。

一体、外で何が起きているのか、それさえも、我は見る事が出来ない。

真つ暗な闇の中、手足を見えない何かで縛り付けられて、動くことすら出来ないのだ。

だが、もうじきに封印は解かれる。一年に一度だけの、我のための祭で・・・。

そのために、今はじっとしていよう。

我は再び、深い眠りについた。

## 復活祭から一日前

翌日。

あたしはいつものように、神社の境内の掃除をしていた。

境内には、明日の復活祭に向けて屋台の準備をしている人たちがたくさんいる。

こんな、普段は誰も来ないボロっちい神社に、これほど大勢の人が来るなんて。

「・・・いよいよ明日ですね」

さっきまで近所のおじさんおばさん軍団の人たちと明日のことについて話していた西条さんが私のすぐ隣に来てくれた。キヤー！  
かっこいい

ここ最近、西条さんは毎日この神社に来てくれる。しかも、いつもあたしに話しかけてくれて、かなり幸せなんですけどっ！ あー、幸せ過ぎて、これはもしかや不幸の前兆？ って思ってしまうくらい。  
「西条さん！ 明日の復活祭には、絶対来てくださいね！ あたしと兄貴で、愛火様の復活の儀式をやるんです！ 復活祭の一番の見所ですから！ 是非見てください！」

あたしは、頑張っつてかわいい感じで言っつてみた。

「ええ、勿論ですよ」

やったー

明日のために、今まで何回も何回も練習を重ねてきたんだし！

いつも着てる色のダサイ巫女服じゃなくて、明日は豪華な巫女服を着て儀式ができる！ そして、あたしと西条さんは、あたしと西条さんは・・・。。。

「・・・海！」

「うわあ！？・・・え、兄貴！？」

「何ニヤけてたの？ こんな調子で明日の儀式、大丈夫なの？」

「あれっ！？ さ、西条さんは？」

「さっき帰った」

「ええー！ー！？ 何で教えてくれなかったの！？」

「だって俺、あっちで屋台の手伝いやってたし。たこ焼きの試食、すぐくおいしかったよ。」

「もー！ こんなときに食べるなあ！」

まったく、兄貴はこう見えて何気に食いしん坊なんだ。

夕日が落ちかけている空を見ながら、結局、明日の準備は夜の1時近くまでかかってしまった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4991i/>

---

T A T A R I 崇リ

2010年10月20日19時35分発行